Ⅰ．第２年次の取り組みの成果と課題

丸山　豊・徳井輝雄
槙本直子・山田　孝
※持山育央・矢木　修

【抄録】　文部省研究開発の第２年次の取り組みを「総合的学習」から推進した。教科像と課題のとり上げ方、中・高での学習方法の系統性、カリキュラムへの位置け、生徒会活動への広がりと生活指導との接点など、総合的学習が学校づくりへ発展せざるを得ない面をとりあげた。

【キーワード】　教科像と生徒像　学習の系統性、カリキュラムと総合人間科「総合的学習」の一般化にむけて

Ⅰ.「総合人間科」が求めるもの（２年次の研究）

１．現場から（総合人間科設置の背景）

研究開発第１年次の報告書に30代半ばの教師は次のように総合人間科について語っている。「自分が20年前に高校で教えられた教科は、現在とほとんどかわっていないことがわかる。これは異常なことではないか。この間社会ではどのような問題が現れてきたか。例えば、老人福祉・高齢化に伴う医療やボランティアの問題、エネルギーや原発問題、臓器移植・脳死・安楽死を含めた生命倫理の問題、森林伐採・フロンによるオゾン層の破壊・放射能汚染による地球破壊の問題、エイズ・それによる差別の問題などなど、これらは日本だけでなく、全世界の問題となっている。しかるに学校特に高校教育の現場において、これらの問題はどのように意識的に体系的に扱われてきたのか。」と。同時に「生徒、親、一部の教師にとって大学入試という現実の前では（前述した問題に取り組む）意義が分かりにくいのも理解できる。」とも書いている。教師が揺れ動いている現実がみえる。

高校の義務教育化の流れの中で多様化する生徒たちの意識も大きく変化している。「なぜ高校へ行くのか」「なぜこの教科を勉強しなければいけないのか」「将来の展望がつかめない」など学校教育の根幹に関わる問題を生活行動で示し始めている。学習が生活の場に生きてこない不満の現れであろう。この悩みは、いわゆる「できる生徒」でも「そうでない生徒」でも変わりない。大半の生徒たちが「自己実現の目標」をみつけられないままなんとなく中高時代を過ごしていくわけである。

このような現実を前に何をすべきなのか。私達は学校改革に取り組む中で数年模索しながら、生徒の自己実現の目標（自分の人生を自覚的に選択する力）を青年期教育の中で明確にしていくことが学校改革の大きな課題であることに気づいた。ここに研究の背景がある。

２．総合人間科がめざす生徒像（自分の人生を自覚的に選択する力）

たとえどのような生き方をしようと、人間は社会や自然の問題から逃れることはできない。生命、環境、平和、民族、人権、開発など21世紀に向けた課題は、世界的、地球的規模の問題である。こうした課題を解決していく力量を一人一人の未来の主権者につけることこそ今の学校教育に求められている。

総合人間科のめざす生徒像を次の２点に集約した。

① 現代の課題を、さまざまな体験を通して自らの問題とし、主体的に学びながら、表現し、友人と共に学びあうことができる生徒像

② 自分の人生を社会と重ね合わせて考え、未来に向けて自覚的に行動していく生徒像

３．青年期教育における（中・高の６年）現代の課題をどう取り上げるか

青年期教育にあって現代の課題をどう選択していくか。中学では、地域を中心に「身近な生活経験」から問題を発見していくことを大事にした。課題を発見していく力を低学年で身につけ、高校では、課題を深く追求し進路選択につながる自分の生き方（自覚的に人生を選択していく力）を考えていくことに主眼をおいて選択した。

※静岡県立浜松西高校（1997.4より）

総合人間科　第１年次と第２年次の学年テーマ一覧

	第１年次のテーマ	第２年次のテーマ	大テーマ
中１	**生き方を探る** －人と地域から、自己発見の機会－	**出会いから学ぶ** －人と地域から生き方を探る－	生き方Ⅰ
中２	**生命の源－水と食物－**	**生命・環境**	生命と環境Ⅰ
中３	**多元的創造的対話をもとめて** 世界の子供たちと広島 －インターネットから－	**平和を考える** －体験を通して考える国際理解－	平和 国際理解 人権　Ⅰ
高１	**生命と環境** －いのちのネットワーク－	**生命と環境** －地球を守るネットワーク－	生命と環境Ⅱ
高２	**平和を学ぶ** －沖縄から世界を考える－	**国際理解と平和・人権** 命ど宝 沖縄の心から平和を学ぶ	平和 国際理解 人権　Ⅱ
高３	**自立を求めて進路を決める**	**自立を求めて生き方を考える** ～社会と自分の進路～	生き方Ⅱ

４．学習方法の転換

全校的に取り組む「総合人間科」で学習方法の転換がどこまで可能なのかが、第１年次からの課題であった。脱教室としての「フィールドワーク」、個々の研究発表での「学びあい」「自己表現」、総合的思考力を担う「研究集録」の発行に至る一連の学習方法は中、高とも共通している。しかし、学習の積上げと広がりの面を系統的にどう示すことができるのかという一年次の課題は未解決のままであるが、各学年とも既存の教科では追求しにくい学習方法を積極的に取り入れている。

① 中１では、個人学習とグループ学習入門を行う。同時にフィールドワークの方法を学ぶ。

② 中２では、個人学習を深めながら、友人と学びあう中から共通テーマを見付け、テーマ別グループ学習を経験する。

③ 中３では、グループ学習を中心とし、インターネットを学びながら、情報の発信を体験させる。

④ 高１では、個人研究を一層深め、パネルディスカッションで討論方法も学ぶ。

⑤ 高２では、グループ（共同）研究を生徒の手によるTT授業体験などで深め、またディベートで討論学習を深める。

⑥ 高３では、進路選択を柱とした個人学習とし、スピーチをとり入れ他者への理解も深める。

総合人間科　学習方法一覧

	研　究　形　態	学　習　方　法	フィールドワーク
中1	個人学習および グループ学習の方法を学ぶ	身近な人との出会い 教師のロールプレイ	1学期　身近な人と出会う フィールドワーク 2学期　地域フィールドワーク
中2	個人学習ではじめて テーマ別グループ学習へ	実験、観察 専門家による合同授業	夏休み　個人でフィールドワーク 2学期　地域フィールドワーク
中3	グループ学習中心	戦争中の食べ物体験 インターネット入門	2学期 広島・大久野島修学旅行 （2泊3日）
高1	個人研究を基本	パネルディスカッション インターネット	2学期 大学、地域 フィールドワーク
高2	グループ研究を基本	生徒のTT授業体験 ディベート	1学期　大学の講義受講 2学期　沖縄研究旅行 （3泊4日）
高3	個人研究	声のメッセージ（CDの作成） スピーチ	社会人（卒業生）の講演 進路（大学、就職）別 フィールドワーク

中高で生徒自身かなり多様な学習方法を体験するわけである。しかし問題点も多い。グループの人間関係、グループ評価、個人研究での趣味的傾向の指導、生徒の研究課題の多様化に伴う教師の指導力など3年次の課題である。

5.「学校行事を総合人間科の核」とすることについて

総合学習の実践の多くは、教科の発展、統合、合科の段階であった。体験重視といいつつ各種の校外行事（旅行、遠足）や鑑賞行事は教科と独立した内容であった。「学校行事」を総合学習として意義づけ体系化させることが学校5日制への対応の道である。このことにより学年全体の教科として特別活動をも包括した核としての総合学習が誕生する。

生徒会主催の文化行事（文化祭、学校祭）も体系化するなら、生徒の自治能力、学校文化の在り方に発展しうる教科となるであろう。

Ⅱ　総合人間科のカリキュラム

１．総合人間科の目標とその教育課程上の特徴

平和と国際理解の教育など人類の課題を正面から取り上げる。これらの課題を修学旅行など学校行事や、文化祭など生徒会活動等の教科外の活動の指導とも結び付けて、生徒が主体的に学び追求するような場面を意識的に準備する。このような学びを通じて、人間としての生き方を選択する力を生徒につかんでもらうことを目標にしている。

そのためには、体験的な学習場面や自由なテーマでの自学自習、さらに生徒同士や生徒と教師の討論や意見発表などの機会を多くすることに留意した授業を展開する。従来の教科の枠を越えたものとするため、担当教師は必修総合人間科においては、学年担任団となっている。即ち、学年が責任を持つ新教科である。また、選択の総合人間科においては、複数教科の教師によるティームティーチングを原則にしている。

以上のような目標や特徴をもつ総合人間科の授業を中学・高校の６学年にわたって全校的に展開した。

２．現状と課題

（１）現状

①　時間数（週当たり）

中学…１年生～２年生　１時間
　　３年生　　２時間
　　（内１時間は選択の時間を利用）

高校…１年生　必修　１時間
　　２年生　必修　１時間
　　選択　２時間
　　３年生　必修　１時間
　　選択　２時間を２つ

②　担当

中学…学年担任団（各学年４人で２クラス担当）

高校…必修　学年担任団
　　（各学年６人で３クラス担当）
　　選択　１科目につき２人で担当
　　（各教科から候補者を選出）

いすれも複数教師によるティームティーチングを原則にしている。教師１当たり20人の生徒を指導する事になった場合は通常のHR単位の授業に比べややきめ細かい指導が可能。

③　授業日

必修総合人間科の場合、隔週土曜日の３・４限（２時間連続）

授業時間の最終時限に位置して校外での授業をしやすくしている

選択の総合人間科の場合は、他の科目と同じ扱い

④　使用教室

各HR教室、図書館、視聴覚室等特別教室

時には、教育学部の講義室や学外の施設

（２）必修総合人間科における、全生徒参加・全教師担当の意義と課題

必修総合人間科の全体的特徴は、次にあげる点である。

６年間の連続性、各学年の固有のテーマを持つ、各種行事と関連づける、学年担任団がティームティーチングを受け持つ。

この内、学年担任団が担当することの意義は大きい。すなわち、この総合人間科は従来の国語、数学と言った教科の枠を越えたものであるが、それを指導する教師の方は、国語の教師、数学の教師といった意識を拭いきれないのが偽らざるところである。しかし、学年担任団として担当することにより、教科の教師としてより、当該学年の教師としての意識で生徒の前に立ちやすい利点がある。即ち我々教師の意識の上で教科の壁を越え易くしている。またこの全学年にわたって担任団が担当すると言うことは、本校の全教師が、総合学習授業の実践経験を積むことにもなっている。これは従来の教科指導のあり方、評価のあり方について根本から考え直す良い機会となる。また、生徒を一教科の立場でみるのではなく多面的に見る良い機会となっている。これらの事は、選別機能の側面が大きい従来の学校を見直し、生徒の自己評価を導入するなど、生徒が主体的に学べる新しい学校作りの契機になる可能性を持っている。一方課題として次の事が残されている。

①　教師の力量の向上とその教科観のより一層の変革

普通高校においては、大学入試との関係を一度断ち切り教科本来の姿を思い描いてみる必要がある。この面で入試と余り関係のない体育、芸術、家庭科の教師の指導性の発揮が期待される。教育本来の立場に立って、総合人間科を学習する意義を生徒に分かりやすく説明し、学習の動機付けが出来るようにする必要がある。

②　学校施設・設備のより一層の拡充

特に、少人数による討論や発表形式の授業に適した教室の設備が望まれる。現在の学校建築の基本思想は多人数の一斉授業の形式に対応したものであり、総合学習形式の教育にそぐわなくなってきている。

また、学習成果の多様な発表形式に対応したプレゼンテータ類の機器設備の充実が必要である。

③　生徒の立場にたった教育課程を

現在の生徒は何に悩み、どんな希望を学校に対して持っているかを常につかみ、それに対応した総合人間科にしていく必要がある。高校生特に3年生の悩みは大きい。大学の受験準備指導の側面と教育本来の基本的指導の側面との兼ねあいの確認が教師集団の中で行われる必要がある。この教科は生徒が自主的に取り組むことやじっくり考える事を指導上の大きな特徴としている。これをカリキュラム編成上においても保障するには、常にアンケート調査などにより生徒のこの教科やさらには学校教育そのものに対する意識を把握しておくと共に生徒の代表などを教育課程作りに参加させる方法を考える必要がある。

（3）選択総合人間科の現状と課題

（3－1）「国際理解と平和」の授業

～高校2年生19名を対象に～

昨年度の担任教師は、社会科と技術・数学科の教師の計2名でそのティームティーチングによって指導された。

①　授業経過

1学期　　生徒と共に授業内容を決めていく

模索期

オリエンテーション。生徒の意識や希望調査。

戦争時の生活を知る。ビデオ（生徒推薦の「遠い夜明け」）をみて人種差別問題を課題にする。グループでテーマを決めて文献を調べる。インターネットを通じて参考資料を探す者もいた。調べた結果をテーマ毎に討論した。

2学期　　テーマを決めて討論（生徒はディベートと称していた）

このディベートは旨くいかず教師の助言を入れて以下の如く生徒がやりなおす手順を決めた。テーマを民族問題、エイズ、いじめとする。全員がまず事前学習をする。そのための資料を分担したグループが集める。次にテーマに即したビデオを見る、これも分担して生徒が探す。その上で討論をする。

②　生徒の様子

4～5月当初は、教師の提示した方針を生徒がやんわり退け自分達で授業をつくると言う意欲があった。実際に生徒の決定に従いやってみる。旨くいかず停滞した時期があった。その時期に教師の助言をいれ立て直した。

③　成果と課題

生徒の主体性を尊重する事ができた。即ち、生徒をカリキュラム作りに参加させたこと、授業の形態も話し合って決めた事などがあげられる。

生徒の選んだ教材がほぼ全員（19名）によって期待感をもって受け入れられた。教師にとっても新鮮さを感じることが出来た。（南アフリカ連邦の映画「遠い夜明け」を取り上げたことなど）

1学期、2学期をみただけでは教材配列に系統性がやや弱く授業主題から少し外れた内容になっている。しかし、3学期に1、2学期の学習内容をまとめることの出来る課題を与え、系統性をもたせた。これも生徒側に提起し話合いで決める必要がある。

次の特徴は、話合いの重視である。ディベートを随所に取り入れる。通常の40名の生徒数では出来にくいことだが、19名と少人数であるという利点を生かして1人ひとりにしゃべる機会を与えることにより論点を生徒のものとする事が出来る。これは更に進んだ学習への端緒となり得る。現状は良く発言できる声の大きい生徒の意見が支配的となり、深く学んではいるが発表力の弱い生徒の考えが生徒に浸透しにくい。また、生徒の自発性の中から生まれたテーマや教材の中から発展性のあるしかも国際理解と平和というこの授業にふさわしいものを見つけ育てていく所に指導教師の力量が試される。

生徒の選んだビデオ映画やインターネットを活用したことも特徴的であった。インターネットについては、自分の必要な情報がいつも手にはいるとは限らないことも知る事が出来、主体性のある利用方法を学んだ生徒もいる。ビデオについては問題意識を持って見ることを学びつつある。

（3－2）「自然と人間」の授業

～高校3年生39名を対象に～

担当は、理科と技術・数学科の教師計2名。ティームティーチング形式。

①　授業経過

1学期　理科Ⅰの環境問題に関連した部分を講義

NHKビデオ「生命」をみせる。さらに講義形式で、自然と人間にかかわる問題提起をする。次に生徒が自由研究のテーマ選びをした。

2学期　前半　テーマに沿ってめいめい自学自

習。テーマの変更が多くみられた。
後半　調べたことを発表
生徒の発表したテーマの一例は次に示す通りである。
　エイズ、サメ、クジラってなに、銀河系とは、砂漠、地震、ごみ問題、地球環境の現状、火の玉、農薬、安楽死と尊厳死、ダイオキシン、インドで考えたこと、開発と自然、二酸化炭素の増加と私の未来、等多岐にわたった。

②　対象生徒

39名。これは、自由テーマにもとずく研究とその結果についての討論をするには多過ぎる人数であった。

理科の科目の化学、生物などと横並びで選択しているため、入試などには理科の要らない進路を選んでいる生徒達である。

勉学意欲の少ない生徒もいる。総合人間科は全然入試には役立たないと考えられているせいか、授業中英語や国語の「内職」をしたり、おしゃべりをするものも多い。

この授業を通じて次の事が分かった。生徒は、ごみやエイズ、高齢化社会問題等身近な問題に関心を持っている。この授業にあまり関心を向けない生徒の中に、例えばディーゼル車の排気ガス問題に触れたくない者（家に持っている）や卒業したらかっこよい車に乗ろうと思っている者がいる。その様な生徒にとっては、この授業は嫌なものであり反発したいものであろうと推測される。勿論この授業により「わが家の車を考え直そう」と思うようになった生徒もいる。この様に生活に響くような授業こそ総合人間科の狙いであるが、担当する教師の生活意識も影響を受けざるをえず、現在の便利な生活を更に進めようとする教師にとっては担当したくない科目であろう。その様な難しさを、この「自然と人間」は持っている。

③授業方法に付いて

ただビデオをみるだけ、講義をするだけ、では生徒の興味関心を引き付け、学習に引き込むことは困難である。課題をしかも比較的にやさしいものを揚げつつ展開しないといけない。多くの生徒にとっては、この授業は「余分なものをやらされている」という心理状況である。入試を間近に控えているので腰を据えて課題に取り組む状況にない。また、39名という人数の多いことや担当者の力量不足で、生徒同士討論させるなどこの授業の特徴が充分出せず、いまのところこの状況を打破できないでいる。人数が多いため自由研究のテーマが多岐にわたり、生徒が幅広い分野の事柄を知る事が出来る。これをあえて多人数の長所としておく。

（３－３）「人類と平和」

～高校３年生21名を対象に～

担当は、社会科と理科の教師が１名ずつ計２名である。ティームティーチング方式。

①　指導経過

１学期　　平和、宗教、憲法等について発表や討論を行う。個人研究テーマの検討を始める。
　　途中インターネットの体験をする。

２学期　　個人テーマ研究発表の準備と実施。

②　成果と課題

成果…自発的に自らの研究テーマを決めて調査をすることが出来るようになった。また、自分の考えを述べることが出来るようになった。

課題…高校３年では、選択総合人間科はもう１科目あり、その教科との兼ね合いが問題である。実際に２科目選択している生徒もあり、同じテーマを研究テーマにしている。教科目の違いをどの様に出すのかが問題である。また、今年スタートしたばかりでどうしても行き当たりばったりになってしまっている。

３．学校５日制への対応

文化祭や修学旅行を学校教育の一環として行うときそこにどの様な意義を見いだすかが論議されるところである。特に学校５日制にむけて、現状の授業時数を確保するため学校行事の精選という名目でこれら有意義な学校行事を取りやめにする場合がある。しかし、例えば、修学旅行を総合的学習の場としてとらえれば、社会科の生きた巡検の場となり或いは理科の野外学習の場となる。行事は授業と必ずしも対立するものではなくなるどころか教室での授業よりも効果的に学習の場として意義あるものとすることが出来る。

現在、中学の１週当たりの授業時間は32時間である。高校も同じく32時間である。将来全土曜日が休みになれば１週30時間になる。２時間の削減をする必要がある。本校では、次の２つの道がある。高校では、現在の必修総合人間科とどれか一つの教科目一時間を削減する。１・２年の削減予定科目は既に用意されている。中学では、総合人間科と生徒活動の時間各１時間計２時間を削減する。

いま一つは、中高共に総合人間科を残す道である。そのためには、各教科から時間を部分的に拠出する道がある。

例えば、生命学や環境教育に関連したものは、生物、地学、物理、化学など理科や倫理や、現代社会など公民科からの拠出。国際理解や平和に関連したものは地歴科と公民科芸術科の学習内容の一部を取り込む。国際平和文化などの科目を創出する場合は、芸術、体育、家庭等も含め全教科の領域を含む。

このように従来の教科の枠を徐々に崩して新しい領域の中に各教科の内容の一部を取り込んで、その分だけ従来の教科目の時間を減らす。教師も複数の教科の担当者がティームを組んで新科目を担当する。

例　環境問題と人類
　　1学期　生物の時間をもらう
　　2学期　政経の時間をもらう
　　3学期　保健の時間をもらう

（4）必修総合人間科と選択総合人間科との関連

（4－1）選択総合人間科の教育課程上の問題点

選択総合人間科は、受験科目の多い国立公立や私学の理系学部をめざす生徒は取りにくい配置になっている。そのため高校3年生においては進路先に依ってまったくとれない生徒がいるかと思えば、3つもとれる生徒がいる。これは教育課程作成に基本構想が大学受験に対応せざるを得なくなっている普通科高校の現状では致し方のない面ではある。したがって、必修総合人間科の意味は大きい。

（4－2）担当教師・生徒の負担と内容の精選

必修総合人間科が担任団のティームティーチングで行われ、全教師が担当している現状にあっては選択総合人間科を担当する教師は必然的にこの両方を担当することになる。これはその教師にとって負担になっている。総合人間科という新しい分野の教材を週2時間分開拓する事と、従来の教科の授業を維持していく事の両方が要求されているからである。

全校的に展開されている必修総合人間科は、中学においては、HRの時間や道徳や生徒活動の時間まで使うときもあり、人に依っては、3単位分の重みに感じられている。また高校でも、HRの時間や放課後の時間をつかい1.5～2単位の重みになっている。

生徒にとっても、これらの授業が生徒の主体性を要求するため、授業時間だけでは対応できず負担になっている側面があり、全部に充分な力を出せない状況である。入試を控えた高校3年生ではこの傾向が強い。

従って、生徒にとっても、教師にとっても、選択の方は1単位で充分だという意見もある。一方、内容を精選して授業時間内で納まる様に展開するなら2単位は必要であるという考えもある。

いずれにしても、総合人間科は生徒の自主的な取り組みを重視し、学習の遅れがちな生徒にもじっくりと総合的に考えさせる授業を目指すものであるからには、生徒にゆとりを持たせる必要がある。

現在用意されている選択科目は人間と「自然」「平和」とに関する内容を扱う事になっている。これらは、必修の方の各学年のテーマの「生命と環境」や「平和を学ぶ」と関連し重複する。これを長所として積極的にとらえるなら、選択では深い内容を扱ったり、授業の立案に生徒を参加させるなど方法面で深化させることが可能になる。これを短所としてとらえるなら、他の重複しない分野を開拓しなければならない。情報教育、コンピュータリテラシーの為の教育、性教育など現在の従来型教科目ではカバーしきれない分野を各教科から出し合い検討する必要がある。いずれも必修、選択両方に於て「充実した内容」と「ゆとり」と言う矛盾した面を克服する授業計画をたてることが課題である。学校行事との結び付きをもっと追求する事と、従来の教科指導との連携強化等が課題解決の糸口になるであろう。

Ⅲ第２年次　総合人間科　指導経過

（１）１学期

月	中学１年	中学２年	中学３年	高校１年	高校２年	高校３年
4月	4月20日　オリエンテーション 総合人間科の目的と内容 （授業参観）					
	生徒発表 これまでに 影響を受けた人 関心を持った人 について	ビデオ鑑賞 「地球汚染 海はひそやかに 警告する」 問題提起	昨年の集録配布 授業過程の説明 25日グループ討論 「誤解から生しる 争い」Ⅰ	カイダンス 昨年度の取り組み の紹介	学年テーマ 目標と方法 テーマ授業の提示 生徒研究発表 昨年の実践から	学年テーマ 目的と内容紹介 アンケート
5月	18日 聞き取り調査 の方法 事前指導 教師の寸劇	18日 レクチャー 「江戸の町の リサイクル」 （県立旭陵高校 高橋伸之教諭） 実習 「水質検査 COD測定」	2日 グループ討論　Ⅱ 9日 異文化体験談　Ⅰ 16日 異文化体験談　Ⅱ 18日 留学生との交流	18日 林間学校における 総合人間科 カイダンス クラス討論準備 ＊5／28～30 林間学校にて ・クラス討論 ・担任団7人より 特別講義	授業チーム決定 18日 テーマ授業に むけて （先生と生徒のティーム・ティーチング） 指導教官別準備 授業内容と方法 24日 テーマ授業案作成	18日 系統別分科会 人文／社会 理工学 農医薬看護 教員家政就職 芸術体育 進路研究 訪問先調査
6月	1日 フィールドワーク （訪問・ 聞き取り調査）	1日 レクチャー 「野生動物の 権利章典」作成 「氾濫する 合成食品添加物」 ↓ 個人研究の 進め方指導準備	1日 インターネットⅠ オリエンテーション情報検索 6日 インターネットⅡ メールの作成交換 13日 広島フィールトワーク 事前学習Ⅰ	1日 林間学校の反省 研究テーマ調査	1日 先生と生徒の ティーム　ティーチング テーマ授業その1 （クラス別） 1テーマ30分 3グループ 国際理解人権平和 民族自然文化産業	5／30 フィールトワーク実施 1日 先輩による講義 （3人） ・職業選択動機 ・職業観 ・生きがい
	15日 フィールド ワークの まとめ	15日 フィールド ワーク 名古屋市環境 学習センター クイズ、ビデオ ゲーム、文献	15日 広島フィールトワーク 事前学習Ⅱ 20日 広島フィールトワーク 事前学習Ⅲ	15日 研究グループ別 事前学習 その1	15日 同　上 テーマ授業その2	15日 フィールドワーク 報告会
	29日 まとめの発表 その1	29日 個人研究テーマ 決定 グループ分け 個人研究 第1回 個人研究構想 文献調査	27日 広島フィールトワーク 事前学習Ⅳ 29日 広島フィールトワークⅤ グループ分け コース話し合い	29日 研究グループ別 事前学習 その2	29日 沖縄研究旅行 全体説明 研究目的方法 （旅行委員会） グループワーク グループ編成 研究テーマ 事前学習計画	29日 卒業研究 内容説明 ワークシート の作成
7月	6日 まとめの発表 その2	6日 個人研究 第2回 教師の個人指導 9日 個人研究 第3回	4日 広島フィールトワークⅥ 6日 広島フィールドワークⅦ 11日 夏休み活動計画Ⅰ 18日 夏休み活動計画Ⅱ	6日 1学期のまとめ 個人研究 テーマ発表会	6日 教育学部特別講義 「学び」を学ぶ （植田先生） 11日 研究旅行 フィールドワーク テーマ決定	6日 卒業研究 スピーチ 「社会と 自分の進路」 原稿執筆

（2）2学期

月	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年	高校3年
9月	7日 野外学習 の事前学習 地域の自然 地域の伝統文化 国際交流 社会福祉ボランティア	7日 個人研究整理	7日 夏休み 聞き取り調査 夏休みの 班別フィールドワーク 発表会	7日 フィールドワーク 実施計画　Ⅰ 夏休み活動報告 フィールドワーク 実施報告	7日 沖縄研究旅行に むけて グループワーク 研究テーマ検討 事前学習方法 係分担決定	7日 卒業研究 スピーチその1 「社会と 自分の進路」
	21日 野外学習にむけて 班決め テーマ決めⅠ	21日 野外学習準備	21日 広島フィールドワーク 行程決定 聞き取り調査内容 見学地事前学習	21日 フィールドワーク 実施計画　Ⅱ 訪問先との交渉 内諾を得る	21日 沖縄学習について ディベート準備 ・役割分担と 内容、留意点 ・討論の流れ 時間配分	21日 卒業研究 スピーチその2 「社会と 自分の進路」
10月	5日 フィールドワーク にむけて 班決め テーマ決めⅡ	4日 野外学習 5日 野外学習 結果整理Ⅰ	3日 OB教官のお話 戦中・戦後の 食事調査 5日 戦時中、戦後の 食事の再現と試食 （調理実習）	5日 フィールドワーク 実施計画　Ⅲ 実施計画書作成 （調査目的・内容）	5日 ディベート準備 第1回 ディベート授業 「沖縄は独立 すべきである」	5日 卒業研究 読み合わせ 発表者選考 自立を求めて 生き方を考える
	19日 フィールドワーク にむけて 訪問先決定 内容検討	19日 野外学習 結果整理Ⅱ 24日 集録原稿作成Ⅰ 31日 集録原稿作成Ⅱ	19日 広島フィールドワーク の事前学習 24日 同　上			
11月	2日 フィールドワーク 訪問先・内容 事前発表会	2日 個人研究 野外学習 成果発表Ⅰ	10／30～11／1 広島修学旅行 2日 フィールドワークまとめ	2日 フィールドワーク 実施計画報告会 質問状作成・送付	2日 第2回　第3回 ディベート授業 「沖縄は独立 すべきである」	2日 卒業CD制作準備 その1
	15日 フィールトワーク実施	9日 個人研究 野外学習 成果発表Ⅱ	7日 フィールドワークまとめ 発表準備　Ⅰ 研究集録原稿	14日 フィールドワーク	11／12～11／15 沖縄研究旅行	16日 卒業CD 制作準備Ⅰ
	16日 フィールドワークの まとめⅠ	16日 個人研究 野外学習 成果発表Ⅲ	14日 フィールドワーク まとめ 発表準備Ⅱ	16日 フィールドワーク 事後指導 ・訪問先への礼状 ・実施報告書作成	16日 事後指導 訪問先への礼状 アンケート	
	28日 フィールドワークの まとめ　Ⅱ 2学期中に 報告書完成	20日 個人研究 野外学習 成果発表Ⅳ 28日 個人研究 野外学習 成果発表　Ⅴ	16日 中間報告会　Ⅰ 21日 中間報告会　Ⅱ 28日 中間報告会　Ⅲ 広島の班別調査	28日 パネル ディスカッション 「地球を守る ネットワーク」	21日 沖縄研究旅行 グループワークまとめ 28日 沖縄研究旅行 グループワーク 研究発表会	28日 学び合い 生き方を考える
12月	7日 名大留学生 との交流	7日 個人研究 野外学習の 成果発表Ⅵ 12日 個人研究 レポート作成	5日 研究集録 原稿完成 7日 個人論文 オリエンテーション	7日 個人研究の まとめにむけて	7日 沖縄研究旅行 研究集録作成 グループワーク 平和メッセージ まとめ	7日 卒業研究のまとめ アンケート 作文

（３） ３学期

月	中学１年	中学２年	中学３年	高校１年	高校２年	高校３年
1 月	フィールドワーク 報告書作り 発表準備	個人研究 レポート作成	９日 研究旅行研究集録 班行動のまとめ 16日　同上 23日　同上	個人研究 報告書作り	研究集録原稿作成 （研究旅行関係） グループワーク 各研究担当	
2 月	１日 フィールドワーク 事後発表会 15日 フィールドワーク 自己評価 相互評価	１日 環境問題の 原因を考える 作文と討論 15日 研究集録 原稿完成	１日　１・２学期 活動報告 ６日　同上 13日　同上 15日　同上 20日　同上	１日 個人研究 報告書推敲完成 ６日 第２回 個人研究発表会 15日 第３回 個人研究発表会	１日 研究集録原稿作成 テーマ授業まとめ ディベートまとめ 15日 １年間の総括 （自己評価・ 相互評価）	
3 月	15日 学年全体 １年間を ふりかえって 意見交換	15日 １年間のまとめ 自己評価 相互評価	６日 個人論文作成 討論 13日 同　上 15日 同　上	15日 １年間のまとめ 自己評価 相互評価	15日 特別講演 「国際理解 人権・平和」 ユネスコ 寺子屋運動 PTA安達さん	

※　総合人間科の授業は中学１年から高校３年まで６学年すべてで土曜日の３・４限で展開した。
※　中学３年生は２単位分実施した。
※　学校行事と関連させて実施したので、この時間以外（おもに放課後）にも指導が行われた。

Ⅳ　学校行事、生活指導と総合人間科

1．脱教室の積極的試み

（1）総合人間科と脱教室の試み

総合人間科の理念から言えば、この脱教室の取り組みは生徒ひとり一人の学ぶ力を育てる意味でも必要である。「教室内」の授業も大切であるが、総合人間科の授業に関して言えば、教室内に止まることなく社会全体をフィールドとして学ぶことが、生徒自身の主体的な力を発揮させる上でも大切ではないだろうか。「人生を自覚的に選択していく力」を育てるには、教室だけでなくもっと大きなフィールドが必要である。それは、実体験をベースとして「教室内」で学んだ内容の検証という意味あいを持っている。

（2）各学年の脱教室＝フィールドワークの取り組み

昨年度より、総合人間科の授業が始まり、脱教室の取り組みも活発になってきた。この総合人間科の始まる以前からも、フィールドワークなどの脱教室の中心とする授業も行われていたが、総合人間科の導入により脱教室の試みも積極的に行われるようになった。現在実施されている脱教室の試みを学年別に紹介する。

中学１年生　フィールドワーク実施
中学２年生　林間学校　フィールドワーク実施（今年度より）
中学３年生　広島研究旅行
高校１年生　林間学校　フィールドワーク実施
高校２年生　沖縄研究旅行
高校３年生　フィールドワーク実施（昨年度より）

以上のように、すべての学年で脱教室＝フィールドワークが実施されている。こうしてみると脱教室の取り組みが、教室での授業の補完的位置役割を果たしていると言える。

（3）高校１年のフィールドワークの実践

生徒ひとり一人が研究テーマを持ち、フィールドにワークに出かける高校一年生の取り組みは脱教室の積極的な取り組みの一つと言えよう。

ここでは、高校１年生のフィールドワークの取り組みを紹介する。

①　高校１年生の取り組み

高校１年生では、総合人間科に初めて出会う学年として、「学び」の方法を学ぶという点から、個人研究テーマを設けて１年間取り組んでいる。そしてその「学び」自体がフィールドワーク＝脱教室を前提として行われている。教室の中だけでは学べない内容については、積極的に外へでて学びを深めることを目的としている。

訪問先については、多い生徒で一人で三ヵ所をまわっている生徒もおり、すべての生徒のテーマと訪問先を紹介することができないので、その一部分だけを紹介する。

ほとんどの生徒が、フィールドワークには意義を感じており、取り組んで成果があったと考えている。（下表参考）

障害者との コミュニケーション	特別養護老人ホーム厚生院 名古屋市名東区勢子坊２－1501	
いじめの問題	東山小学校 千種区橋本町３－20	愛教大　折出研究室
優しい気持ち	教育学部吉田先生	精神薄弱施設あけぼの学園 天白区植田山２－101
学校の必要性	愛工大	名大総合保健体育科学センター 矢部先生
子どものための幼児施設	汁谷保育園 千種区汁谷39	よもぎ幼稚園 名東区よもぎ台１－101
大気汚染を くいとめることは可能か	県庁環境部大気保全課	名古屋大学工学部地圏環境工学 環境システム　　松下先生
原子力発電と放射性廃棄物	名大アイソトープ総合センター 竹島先生	名大原子核工学科 山本先生
森と人	愛知県森林組合連合会	名大農学部森林学科 安田先生

② 大学施設の積極的活用

昨年度の、高校１年生より個人研究テーマ制になり、訪問先が多岐になった時、大いに力となったのが名古屋大学の人的資源であった。今年度も名古屋大学の様々な研究施設でお話を伺うことができた。これは、附属学校の利点でもある。

脱教室と言うことでは、単にフィールドワークだけでなく、教室を飛び出して違う環境で学ぶことも含まれると考えられる。そういう点で言えば、昨年度より高校１年生と高校２年生で実施された、共同研究の教育学部の先生による特別講義も脱教室の取り組みと言える。昨年度は、高校１年生では新海先生が、高校２年生では植田先生が教育学部の大講義室で特別講義を行ってくれた。高校生にとっては、大学の講義室での授業と言うことで、通常の授業にはない緊張感で授業を受けれたのではないだろうか。

（４）脱教室は「学び」の「わかり直し」

高校２年生では、沖縄に研究旅行に出かける。通常の授業であれば、教室で学び教室の中で授業が完結するのだが、フィールドワークでは訪問してさらに疑問点や新たな関心が生まれ、次の発展へ繋がっていく。フィールドワークでは、実際に行ってみないと分からないことが多い。いくら書物で調べたり、教室で学んでも実際の現実の重さに勝る物はない。沖縄の研究旅行でも、最近では身近にも沖縄の情報が入ってくるようになり、それなりに沖縄に出かけなくても知識を吸収できるようになった。しかし、実際のところ行ってみてはじめて分かることもあるし、沖縄の場合は、戦跡や今尚存在する米軍基地を目の当たりにして学ぶ内容も多い。さらに、脱教室で重要なのは現場で話を聞くと言うことである。昨年度高校２年で実施した沖縄研究旅行でも、こちらで調べたことがすべて「間違っていた」事実に接して大きなショックを受けたグループもあった。多かれ少なかれどのグループも、教室内で学んだことよりも現実の方が大変であることに気づいた。ここに、「教室内」で学んだことの「学び直し」が行われた。体験することにより、学んだ内容がさらに生徒の内面で「深化」したと言ってよいのではないだろうか。

こうした脱教室の取り組みは、「教室内」の「学び」を発展させる上でも需要であろう。生徒が主体となる総合人間科の授業では、脱教室の取り組みは今後とも重要な位置を占めることになるだろう。

２．生徒の主体的活動としての取り組み

～学校祭（分科会・展示・演劇）～

総合人間科を基盤とした生徒の主体的な活動の一部として、学校祭を紹介したいと思う。今年度の学校祭は、９月25日（水）から27日（金）までの３日間の予定で行われた。１・２日目がいわゆる文化祭、３日目が体育祭である。中学校と高等学校と共同開催であるが、テーマはそれぞれ設けられている。（以下の通り）

中学校：輝け我らの学校祭

～LOVE AND PEACE FOREVER～

高等学校：そうともそれが青春さ

～自然に帰ろう'96～

また、今年度の学校祭の大まかな日程を次に掲げる。

学校祭96日程

●第１日目	午前		午後		
高校	開会式	※分科会	生徒会執行部企画（HR企画・部サークル・学校祭全体のCM）		
中学校		※演劇コンクール	生徒会企画（ドッヂボール）		
合同		作品コンクール・※総合人間科展示			
●第２日目	午前		午後		
高校	ホームルーム企画		後片づけ・準備	有志発表	
	模擬店・バザー				
中学校	※演劇コンクール		生徒会企画（ウルトラクイズ）		
合同	作品コンクール・※総合人間科展示				
●第３日目	午前		午後		
合同	体育祭			演劇サークル公演 合唱サークル公演	閉会式

上記日程の内、※印の付いた、高校「分科会」、中学校「演劇コンクール」、中高合同「総合人間科展示」を、総合人間科を基盤とした学校祭での生徒の主体的取り組みとして紹介する。

① 高校「分科会」

高校生の開会式に次ぐ企画「分科会」は、生徒・PTAが主催する16の講座に全員が分散し、文化的・体育的な活動をする企画である。

この機会に、生徒が自分の興味ある分野の専門家に話を聞いたり、その実際を見学したりする講座を昨年度から設けている。名古屋大学の中にある好立地条件を生かして、名古屋大学の各研究室を訪問する、名付けて「名大へ行こう」である。生徒全員に名古屋大学の研究室を紹介すると同時にアンケートをとり、「是非行ってみたい」と思う研究室の投票を行った。その結果を受け、学校長を通して直接交渉したところ、以下の研究室が生徒の受け入れを快く承諾してくれた。（今年度は、幸運にも、得票数の多かった方から４つの研究室にご協力がいただけた。）

分科会「名大へ行こう」（学校祭のパンフレットより）

No	講座名	内容	主催者	実施場所
13	航空専攻見学講座－空の飛び方・飛ばせ方（工学部機械航空工学科曽我教授）	航空工学の基礎を名大の先生方に講義してもらいます。知識に自信のない人でも、興味と関心があればどうぞござれ。あなたも一緒に空の飛び方、知って見ませんか？	２C谷口	工学部機械航空工学科
14	Let's study “Social Environment Engineering”（工学部浅岡教授）	講座名わかりますか？まぁ簡単に言ってしまうと“社会環境工学を学ぼう”っていう感じです。これから21世紀に向けてこの分野は発展していくと思われます。興味のある人もない人も一度考えてみませんか？	３A坪内 ３C佐藤	工学部社会環境系
15	大気水圏科学研究所（田中教授）	我々の知っている環境問題の知識はウソ、本当？知らないことも、もっとたくさんある？今のままだと地球はどうなる？今不安になった人、大気水圏科学研究所に一緒に出かけましょう！	３A中村	大気水圏科学研究所
16	教育経営学（教育学部教育学科植田助教授）	教育経営学を研究していらっしゃる植田先生から“学校のあり方”を学びます。北海道の宗谷地区の教育システムは、生徒のための学校を作り上げているのです。	２A網屋 ２C安達	教育学部教育学科

自分の興味のある分野は、自分の将来の進路にも何らかの形でつながっている。しかし、その実際を見学したり体験したりする機会が、現役の高校生には少ない。また、生徒が「行ってみたい」「見てみたい」と考える研究室に伺えることは、前述のことと併せて、意味の深いことだと考える。

② 中学校「演劇コンクール」

演劇コンクールは、学校祭において中学生の中心的な企画である。１学期中旬の台本選びから始まり、演劇実行委員を中心に、クラス一丸となって練習に取り組み、本番を迎える。これは、本校の伝統的な企画であり、毎年、好評を得る。

扱うテーマは、まさに総合人間科に結びついているといっても過言ではない。本年度の中学６クラスの演劇のタイトルとテーマを紹介する。

中学演劇コンクール

クラス	演劇のタイトル	テーマ（訴えること）
１年Ａ組	蜃気楼	戦争のおろかさ
１年Ｂ組	戦争は終わらない	平和の大切さ
２年Ａ組	学園祭殺人事件	人間の弱い心（自己中心性）
２年Ｂ組	チェルノブイリの悲劇	原発事故のおそろしさ
３年Ａ組	人形館	人間性を求めて……
３年Ｂ組	（子供＋大人）÷２	思春期の迷い

「生き方」「生命と環境」「国際理解と平和」という総合人間科のテーマと照らし合わせると、演劇からも、それぞれのテーマについて学習している様子を伺うことができる。

③　中高合同「総合人間科展示」

昨年度に引き続き、各学年の１学期から夏休みにかけての取り組みを、展示、ビデオ、昨年度の集録で紹介した。場所は書道教室である。

今年の生徒会の方針には、昨年度からの変更点が２点ある。まず１点目は、なるべく「生徒のことば」でまとめることであった。昨年度は、総合人間科初年度ということもあり、教師がまとめの原稿を作ったという経緯を受けたものである。２点目は、総合人間科の取り組みを紹介するビデオ作りをすることである。これも、なるべく「生徒のことば・視点」でということであった。昨年度にはなかった試みである。

各クラス２名の総合人間科展示実行委員を選出し、15クラス（中学各学年２クラス、高校各学年３クラス）30名の実行委員の手によって、展示物（B紙／パネル）の作成が行われた。１学期中に、それまでの活動を、実行委員がまとめて執行部の担当者に提出し、夏休みに目を通し、２学期には展示物の作成をするという日程で作業が進められた。

また、ビデオの作成では、１学期に６学年で撮影された総合人間科の様子のビデオから、各学年の紹介にふさわしい場面を約５分間ずつ選び出し、最後に編集するという具合で作業が進められた。

「１学期の総合人間科の取り組み」ビデオコメント

● このビデオでは、総合人間科の、今年度、１学期の取り組みを紹介します。

● 中学１年生では、「出会いから学ぶ」というテーマのもと、（以下省略）

● 次は、中学２年生です。（以下省略）

● 中学３年生では、「平和と国際理解１、体験を通して考える国際理解」というテーマで学習を進めてきました。まずは、身近な「誤解」体験を話し合ったり、先生方の異文化体験を聞いたり、留学生との意見交換をしたりしました。その場面を紹介します。
また、夏休みには、聞き取り調査や見学をしました。これは、その発表会の様子です。
今後は、主に、広島研究旅行に向けての事前学習をします。広島では、これまでの学習の成果を、充分に発揮していきたいと思っています。

● 次は、高校１年生です。
高校１年生では、「生命と環境２」というテーマで学習しています。
これは、５月下旬に実施した林間学校での討論会の模様です。まずは、クラスで「話し合える環境づくり」を目標に実施しました。意見が活発に取り交わされ、充分な成果があがったと思います。
このあと、個人の研究テーマを設定し、11月の野外学習を目指して、今は事前学習と訪問先への交渉をしている段階です。
最後に、全員の研究成果を、集録にまとめることを予定しています。

● 高校２年生では、「国際理解、人権、平和」というテーマのもと（以下省略）

● 最後は、高校３年生です。
高校３年生では、「自立を求めて、生き方を探る（社会と自分の進路）」というテーマを設定しました。目前に迫った、卒業の進路を、自覚的に考えるのが、目標です。
進路希望先への訪問調査や、先輩である卒業生の話を聞いて、自分の進路を改めて考えてみました。そして、「自分達の今までの生き方と、これからの

進路」について、それぞれがまとめ、スピーチをしました。これは、その場面です。
今後は、卒業CDと、卒業論文の制作に向けての準備、作業をしていきます。
● 以上で、総合人間科の、１学期の取り組みの紹介を、終わります。

最後に、総合人間科展示室の出口付近に設置した**アンケートの回答**を紹介する。

【生徒の回答】

・毎年、私はこの展示が楽しみです。今回は、いつにも増して充実していたように思います。みんながもっと関心を持ってくれると嬉しいです。（高３女）
・ビデオがすごいと思った。いつのまにあんなことやったんでしょう？（高２女）
・上手にまとめてあって、わかりやすくおもしろかった。（中２女）
・学年ごとに考えていることがよくわかった。「なぜそうなのか」を考えることが大事だと思った。（高２男）

【保護者の回答】

・社会に目を向けて取り組んでこられた後が、よくわかりました。これからも、自分の事、社会の事、両方をしっかり見つめてください。（中２）
・各学年、それぞれ特色が出ていて、上手くまとめてある。発表もまだ途中なので、完成の時が楽しみだ。（中２）
・小学校でも“総合”として取り組んでいますが、中学、高校は、より深く知り、学んでいけると思います。是非続けていってください。（東浦町緒川小）
・ビデオがよくできていた。日頃の取り組みの様子がわかって、たいへん良かった。
・皆、よくまとまっていて、頑張っている様子がよくわかります。この内容を、家庭でももっともっと話題に出して欲しいものです。

３．今後の生活指導への取り組み課題

総合人間科との関わりで、昨年度の生徒の生活実態を見てみると、研究の目的とするところの「自分の人生の自覚的に選択していく力を育てる」という点においては、環境、生命、平和、国際理解など、いろいろな事を調査し、まとめ、そして新たなる自己を発見する力についてはかなり評価出来ると思われる。しかし、それが日常の校内での、また校外での生活に直接に結びついて生きているかどうかはかなり疑問である。もっとも、総合人間科が生徒個々の実生活へ与える効果が果たしてあるのかどうかの結論を早急に求める事は出来ないであろう。が、現状を見てみると、生徒達は総合人間科で求めている力「自分の人生…」を伸ばす事だけでなく、日常の生活にこれをどう結びつけていくのかという「合意形成」が欠けていると思われる。また、教師自身についても、理想の生徒像の育成のために、新しい子ども観のうえに立った生活指導の在り方について「合意形成」が求められている時期であると考えられる。

（１）理想の生徒像

本校の目的は、学則に「小学校（中学校）における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、中等（高等）普通教育を施すとともに、名古屋大学教育学部の教育研究計画に従って、教育の理論及び実際に関する研究並びにその実証を行い、兼て名古屋大学学生の教育実習を行うことを目的とする。」とある。この目的に沿って次のような２つの教育方針が挙げられている。「心豊かにして主体性のある人間形成を企図する。また情緒豊かにして、総合的に物事を把握し、創造的に活動し得る態度と能力とを養う。」「それぞれの生徒の教育的にして自由な眼をもって凝視し、その個性と能力とを伸長し得るように教育方法を…」の２つである。このように、生徒の主体性、個性と能力の伸長を目指す教育内容・方法にするよう努めなくてはならない。

よって、本校の目指す理想の生徒像を「主体的に物事をとらえ、考えたことを自分の言葉で表現したり、行動できる生徒」とすることができる。

（２）新しい子ども観

現在の子ども達は、多種多様なものが存在する社会のなかに生きている。その社会生活の矛盾・対立が子ども達の生活の中に浸透し、自分達の集団の中で自分達にとって都合のよい風に解釈されてきている。「いじめ・差別」「遊び・おしゃべり」などの行動の中に、子ども達への社会の影響が現れている。

さらに、保護者の多様なる価値観の中で育てられた子ども達に、過去からの伝統的な教師の考える規範意識・道徳観が通用しにくくなっているように思われる。このような子ども達に、社会人として最低限守るべきルール（法律的、道徳的）を指導していくために、どのようにして家庭と学校が連携していくかが問題となる。

上記のように、新しい子ども観に立って、理想の

生徒像育成にせまるためには、校内分掌上の組織の問題検討、一致した指導目標のもとで生徒の自主性を育てる指導体制の在り方見直し、生徒の自主活動を活発化させるために生徒会ならびに委員会組織の見直し、家庭、地域との連携の取り方等、早急に見直していく必要があろう。

Ⅴ　名古屋大学の附属として

１．大学との協力体制

名古屋大学のキャンパスにある附属として、恵まれた環境を最大限にいかすことができる教科として「総合人間科」を位置付ける努力をしている。

（１）教育学部教官との共同研究体制

中高各学年に共同研究者として教育学部教官とともに研究を進めている。総合人間科の展開は土曜３～４限は大学の休業日でもあり授業に参加したりVTRによる記録などを行ったり、総合人間科に対する意識等の実態についての調査方法についても指導を受けている。

また、科学研究費対象研究として、総合人間科の教育学的見地からの共同研究もすすめている。

（２）大学講義への参加

総合人間科の授業の一環として高校生を対象に教育学部で受講経験をした。大学の講義に触れ、学問とは何か。学びの意義を知ることがねらいである。

中学生では、３年生にインターネットの利用について同様に学部教官のレクチャーを受けた。

（３）大学の人的、物的リソースの積極的活用

① 本年度学校祭での研究室訪問
　工学部　機械航空工学　社会環境工学
　大気水圏科学研究所
　教育学部　教育経営学研究室

② 高校１年フィールドワークでの訪問取材
　総合保健体育科学センター
　情報文化科学部
　附属病院（内科、脳神経外科、神経科）
　医学部法医学講座
　教育学部教育相談室、発達心理臨床学研究室
　医療技術短大看護学科　アイソトープ総合センター
　工学部地圏環境工学環境システム　原子核工学科　農学部森林学科

③ 中学１年生フィールドワーク
　留学生センター
　いずれも生徒自身の課題解決として、名古屋大学の研究施設を直接自分の目で確かめ、研究者のレクチャーを受けることができた。学びの意義、進路、人生の選択に大きく影響すると思われる。

④ 留学生から学ぶ
　世界各国から集まる名古屋大学の留学生を本校に招いて、交流しつつ学ぶことも総合人間科を利用してどの学年も実践が可能になった。

２．地域に学ぶ（脱教室の持つ教育力）

脱教室、体験を目的とした各学年フィールドワークは実に百数十か所以上に及んでいる。必ず取材活動を義務付けているため、単なる見学では終わらない。そこには、様々な人との出会いあり、その学びは教材では捉えきれない総合性を持つことは言うまでもない。教師、学校の教育力をはるかに優る感動がある。

３．学校ボランティアの制度化

保護者・地域と学校との結びつきの強化が呼ばれている中で、学校ボランティア（以下スクールボランティアとする）の制度化も今年度の課題である。

本校では従来、学校祭、フィールドワークなどの領域での、保護者の協力は得られていた。学校祭においては、PTAがバザー、作品展などを開くだけでなく、生徒主催の分科会（講座）に、講師として参加していた。海外在留の体験をもとに、外国の文化や風習の話をしたり、趣味や特技を生かして、七宝焼やパッチワークなどの技術指導をしていた。フィールドワークでは、保護者の職場を見学先として、説明を担当していただいたりしたこともある。

以上のように、スクールボランティアはすでに実施されていたとも言えるが、それぞれの担当者が個別に交渉して、協力をいただいたものであった。スクールボランティアについては、PTA全体に呼び掛け、自発的に協力していただける方を登録し、教育活動のなかに積極的に参加していただくことが本来の姿であろうと考える。このような考えに基づいて、昨年度は次のような経緯でスクールボランティア制度化に取り組んだ。

５月27日　PTA役員会で、スクールボランティア専門委員会の設置決まる。
６月27日　PTA会長・学校長連名の「スクールボランティア協力依頼」のプリント配布。
７月７日　スクールボランティアの申し出第一回締め切り。応募者６名。

9月25日　学校祭の分科会に講師として2名参加。

現在、スクールボランティアとして登録している保護者は7名で、テーマは、次のとおりである。

・戦争体験の話　・パッチワークの指導
・図書館にまつわる話　・ユネスコ活動について
・法律、人権　・保育講座
・新聞編集者としての話

本校のスクールボランティアの制度化は、始まったばかりで、保護者への宣伝も、保護者の理解もまで十分ではない。登録者の数も極めて少ない。「総合人間科」の授業への参加、協力は今のところ高校2年で「国際理解と平和」のテーマでユネスコ活動を取りあげた例があるだけである。「総合人間科」の取り組みについての宣伝、理解が進めば、スクールボランティアとしての登録も増えるであろうし、そうなってこそ、「総合人間科」の授業も、保護者とともに作り上げて行く体制ができ上がると言える。

教師の側にも、スクールボランティアの「総合人間科」への協力、参加を要請する意識が乏しい現状がある。「総合人間科」の授業やフィールドワークの場面での、スクールボランティアの参加、協力をより多く実現して、スクールボランティアの制度を軌道に乗せて行くことが今後の課題である。

Ⅵ　研究の課題
（総合的学習の時間としての一般化に向けて）

1．総合人間科と学校の在り方

（1）学力保障との関連で

①　自ら学ぶ意欲につながる基礎、基本及びそのための学力保障はどうあるべきか

教科における学力保障も解決されないまま、全ての教科で「生徒自身が課題を発見し、調べ、まとめ、表現していく学習方法」が展開されるとしたら、生徒も教師も対応できない現実がある。新しい学習観を「総合的学習の時間」の核とし、全ての教師が教科を超えて関わることで学力保障への取り組みが可能になる。

つまり、「総合的学習の時間」で学ぶために各教師の専門教科の何がいかされるかが問われてくるからである。

②　学習体験の転移について

生徒の立場から考えると、この学習体験が教科への意欲として転移するか否かが問題である。大学入試の学力観が変わらない限りむずかしいが、個々の生徒の変化は実践の中で明らかにされつつある。

（2）何のために、なぜ「総合的学習の時間」なのか

①　生徒自身の生き方の模索をテーマにできる。

生命、開発、環境、平和、国際理解、人権、進路選択、民族といった大テーマを取り上げることで「総合的学習」の必然性が生じる。

②　すべてを生徒にまかせ、委ねてはならない。「何を」に学校の特質を持たせることができる。

主体的活動を保障することは大事だが、「何を取り上げるか」にその学校の在り方が問われる。各学校は、「総合的学習の時間」でこそ特色を主張することが重要である。

③　教科統合の課題学習や共同学習ではない「新教科」の性格を追究できる。

教科の延長としての課題学習を教科担当が指導していたのでは、包括的な教科としての「総合的学習の時間」にはならない。教科の枠、教科内容の系統からの脱出がどこまで可能か。

④　TTからプロジェクトによるティーム指導が可能になる。

2人で取り組むTTから学年、またはテーマ別プロジェクトのティーム化の試みを提唱したい。教師の「総合化」が可能になる。教師自らが専門教科を忘れることも大事である。

（3）総合的学習の時間の名称をどうするか

①　各学校の独自性を打ち出した名称

単なる「総合学習」のみの名称では、具体的なイメージが浮かばないし、逆に「環境科」、「国際科」では包括的かつ総合的に捉えられない恐れがある。地域的特色を学校として打ち出すことができる名称が望ましい。

本校は「総合的課題」を「教室を飛び出して」「様々な人から学ぶ」という意味を込めて、「総合人間科」とした。

2．総合的学習を進めるための カリキュラムの諸課題

（1）中学校でのカリキュラムの中で

①　時間数の問題（道徳、特活の包括をめざして）

現行では、隔週土曜日3～4限の連続で時間割りに組み込んでいる。通年で週あたり1時間である。このような学習形態を追究していくには時間不足であったといえる。事実、道徳や学校裁量の時間、学級活動を利用して展開されている。

「総合人間科」の教科目標に生徒の自治活動を位置付けることにより、道徳教育と特別活動・学

校行事も包括した「総合的学習の時間」が可能になる。

② 各教科の選択教科統合としての「総合的学習の時間」の提言

選択教科と総合的学習の両立は可能か、という問題がある。学習条件が未整備な状態ではいかに全校的な目標をもって、全教師が取り組むことができるかを考えると両立は難しいといわざるを得ない。

本校の「総合人間科」は、教師の指導の多様性、生徒が選ぶテーマの多様性、表現力の豊さ、いずれをとっても選択教科とクロスする部分がある。指導する教師にとっては教師の専門性をどこでどのように発揮できるかが問われてくる。

（２）高等学校でのカリキュラム

① 学校改革としての教育のひろがりとまとまり

選択の幅の拡大は、高校の大学化現象を促すであろう。生徒どうしを結び付けていたいわゆる「ホームルーム」も変容しているのが実情である。高等学校での総合的学習の時間の設置は生徒の人生選択としての目標を明確にすることで学校を改革する視点が生じてくる。従来の高校教育にない学習観の合意形成が実践の中から生まれてくるからである。

② 調査書、評定平均をどうするか。

いわゆる「調査書」問題がある。評価と評定との関係、評定平均の算出に伴う問題、大学がこのような「総合的学習の時間」をどう扱うかなど新教科設置の周辺的問題の整理が必要である。

③ カリキュラムと生徒の主体性の問題

高校生の発達段階に照らして、「総合的学習の時間」の内容を生徒とともに創り上げていきことがどこまで可能かという問題も提起されている。他の既存教科と性格を異にする以上生徒の主体的な関わり方が検討されなければならないだろう。

３．教師、学校５日制、学習環境等の問題

（１）教師の多忙化

平均週１時間にすぎない「総合人間科」だが、脱教室を唱えたフィールドワークの準備、調整、時間外指導など教師一人にかかる負担はかなりのものである。また、総合的学習の展開は教師自身の高度な総合性が求められ、幅広い研究と能力、時間的な保障等の問題が生じている。しかし、教師自身の不慣れからくる戸惑いも２年目の研究段階ではかなり改善されてきた。

（２）学校５日制の問題

学校行事の精選が話題となるが、総合的学習の中に組み入れる視点で精選を図ることが重要になる。行事＝総合的学習の授業ということである。各教科の選択と合科も組み込んでスリム化を図る必要がある。

（３）学習環境の条件整備

（生徒が主体となる条件整備を）

情報のネットワーク、メディアの環境整備が望まれるところである。公的な研究機関の利用を中・高生に開くこと、地域。保護者の社会人講師としてのボランティア整備（学校ボランティア）など、学校として積極的に働きかけていく必要がある。

４．おわりに

環境教育、情報教育、性教育、人権教育、消費者教育と学校に期待される教育内容は多様であり全てをとり入れることは困難である。学校、保護者、地域で選択し「総合的学習の時間」の中身を新しい理念に基づき、いかに創り出していくかである。